

# アングロ・ノルマン版「ブランダンの航海」試訳

## Traduction du *Voyage du Saint Brendan* écrit en anglo-normand

伊 藤 了 子

Ryoko ITO

アエリス王妃様、あなたのおかげで神の教えが守られ、あなたのおかげでこの世の信仰が固められ、<sup>4</sup> アンリ王の軍隊の力とあなたの賢明な忠告により多くの戦争は終りを告げるであろう。そのようなあなたに伝導者ドン・ブノワは限りない敬意を表する。彼はあなたが命じたことを試み、全力を尽してあなたの命令どおり偉大な大修道院長・聖ブランダンについて文字にしたのである。しかもロマンス語で。彼は自分が知っていることを話し、自分にできることをしているのであるから、彼が嘲弄されないよう守って下さい。<sup>16</sup> このような僕を咎めるべきではない。しかし能力があるのに努力しない者は苦しむのが当然である。

この「神の聖人」は王家に生まれた。<sup>20</sup> 彼はアイルランドの人であった。彼は王家の血筋であったので、崇高な目的に身を捧げた。彼は聖書に「この世の快樂を避ける者は、<sup>24</sup> それ以上望めないほどの喜びを神と共に得るであろう」と書かれていることをよく知っていた。それゆえこの王位継承者はこれらの真理のために偽りの榮譽を捨てた。<sup>28</sup> 追放の身としてこの世で謙虚に生きるため僧服をまとい、修道院に入り修道士となり、<sup>32</sup> そして心ならずも大修道院長に選ばれた。彼の溢れんばかりの徳ゆえに多くの者が集まり、修道会に入った。敬虔なるブランダンは各地に<sup>36</sup> 3千人の修道士を従えていた。彼の徳は偉大であったので全ての者が彼を手本とした。

大修道院長ブランダンは<sup>40</sup> 大そう深い知恵と偉大な英知と熱意を備えた人として、大いなる正義の人として、<sup>44</sup> 自分自身と家族、および全ての死者や生者のために神に祈り続ける決心をした。全ては彼の友達であるからである。しかし彼はあることを望み、<sup>48</sup> そのために常にも増して神に祈り始めた。アダムが最初に置かれた天国、我々が受け継ぐはずであったのに<sup>52</sup> 相続権を奪われたあの天国を見せ給えと。聖書に書かれているようにそこには偉大な栄光があることを彼は確信している。それでも彼は、<sup>56</sup> 当然の権利として彼が住むはずであったのに、アダムが誤って罪を犯したことにより、アダム自身と次いで我々が追放されたその場所を見たい。<sup>60</sup> それをこの目で見せ給えと彼は熱心に神に祈った。善人たちがどのよ

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

うな住居を与えられるはずであるか、悪人たちがどのような場所を与えられるはずであるか、彼らがどのような徳を受けることになるかを彼は死ぬ前に見たい。彼は地獄と、そして傲慢によりこの世で大胆にも神と神の教えに背き、愛も信仰も知らない者たちがそこでどのような刑罰を受けるのかも共に見せ給えと祈る。

ブランダン<sup>72</sup>は彼の望みに対する神のみこころを知りたいと思う。彼はまず神の僕に告白をしに行く決心をした。それはバリントという名の隠者であった。その品行は正しく、聖なる生活を営んでいた。この神の忠実な僕は森に住んでいた。彼と共に3百人の修道士がいた。ブランダン<sup>80</sup>は彼の忠告と助言を受け、彼が支持してくれることを望む。バリントはブランダン<sup>84</sup>に多くを語り、彼が教子を捜しに行ったとき海と陸で見たすばらしい実例と見事な教訓を示した。その教子はメルノックという名で、バリントが大修道院長をしている所の修道士であった。しかし彼はどこか他の場所でもっと孤独になりたいと切に望んだ。大修道院長と教父の同意を得て彼は出帆し、大成功を収めた。というのは彼は、敬虔な者以外誰も入ることのできない場所に到達したからである。それは海に浮ぶ島であった。そこでは不快な風が吹くことはなく、天国の花が放つあの香に溢れている。聖メルノックが舟でたどり着いたこの島は天国に非常に近いからである。彼は天国の生活を送り、天使たちの声を聞いた。それからバリントが彼を捜し出し、彼がブランダンに語ったものをそこで見た。

ブランダン<sup>104</sup>はバリントがそこで見た光景について話すのを聞くと、一層決心が固まり、準備を始める。彼は修道士の中から最良と思われる14人を選ぶ。彼らに計画を話し、それが賢明な行為であるかどうか彼らの意見を求めた。彼らはブランダンからそのことを聞くと、2人ずつ組になって話し合った。彼らは一斉に彼の計画は勇敢であると答え、自分たちは信仰に厚い教子であるので彼と共に連れて行ってくれと頼む。ブランダン<sup>116</sup>はこう言った。「私がこのことを話すのは、後で後悔するよりも、あなた方をここから連れて行く前にあなた方に確かめておきたかったからである。」私たちのせいであなたが暇取ることはありませんと彼らは請け合う。彼らの言葉を聞くと、大修道院長はこれらの選ばれた者たちを従え、彼らを礼拝堂に導いた。そこで分別の人として彼は彼らに言う。「諸君、我々は、我々が考えたことがどれほど困難であるかを知らない。しかし神が我々をお導き下さるよう、また喜こんで我々をそこに連れて行って下さるよう祈ろう。我々をそこに導き給うよう、聖霊の名において断食をしよう。週に3日、40日の間断食をしよう。」そのとき彼の命令を実行するのに暇取る者は誰もいなかった。旅の間どのように進むべきかを彼に教えてくれる天の使いを神が遣わし給うまで、大修道院長は昼夜祈禱を止めない。天使が彼の心に啓示を与えたので、彼はどれほど神が彼の出発を望んでおられるかを確信した。

そこでブランダン<sup>140</sup>は修道士たちに別れを告げた。彼は彼らに対し非常にやさしい教父であった。彼は旅について、そしてどのように神に旅を委ねたいと思っているかを彼らに話

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

した。全ての修道士を小修道院長に預け、彼らをどのように監督しなければならないかを話した。修道士たちには、彼に従い、自分たちの大修道院長に対するようによく仕えよと命じる。それからブランダン<sup>152</sup>は彼らに接吻し、出発する。彼らの教父が<sup>156</sup>14人の修道士しか連れて行くことを望まないで、皆は大いに悲しんで泣く。

ブランダンは大洋に向かって進む。彼はそこで海に出なければならないという神の啓示を聞いた。彼は決して親族の方には向わなかった。<sup>160</sup>もっと大切な場所に行こうとしているのである。彼は大地が続く限り進んだ。休息することなど考えもしなかった。<sup>164</sup>今日民衆が「ブランダンの跳躍」と呼ぶ岩のところにやって来た。その岩は岬のように大洋の上に遠く突き出ている。その岬の下にひとつの港があり、<sup>168</sup>そこから小川が海に流れ込んでいる。しかしその流れは小さく、非常に狭く、岩壁から直接流れ出ていた。ブランダンより前に<sup>172</sup>この山の下におりた人はいなかったと私は思う。まさにその場所に木材を持って来させ、それを使って舟を作らせた。内部は全てもみ材、<sup>176</sup>外部は牛皮で被わせた。波の上を滑り、よく走るように舟に油を塗らせた。彼は必要なだけ、<sup>180</sup>また舟が運べるだけの道具を入れた。彼らがそこに持って来ていた食料も一緒に入れた。<sup>184</sup>40日分の食料しか積み込まなかった。彼は修道士たちに言った。「中に入りなさい。神に感謝せよ。順風である。」

全員が、そして彼が後から入った。<sup>188</sup>突然そこに3人の男が走って来た。大声でブランダン<sup>192</sup>を呼びながら、そして彼らの掌をブランダンの方に差し出しながら。「私たちはあなたの修道院から来ました。ここまであなたの後を追って来ました。大修道院長、あなたと一緒に乗せて下さい。あなたと共に航海させて下さい。」ブランダンは彼らを知っていたので受け入れた。<sup>196</sup>彼はその結果何が起きるかを予め知っている。彼は神により予知したことを彼らに隠さず、むしろ言った。<sup>200</sup>「アビラムやダタンの場合同様、サタンがあなた方のうち2人を所有するであろう。あなた方のうち第三の者は多いに試されるが、神に支持されるであろう。」大修道院長ブランダンはこう言い終ると、<sup>204</sup>両手を上にあげ、あなたの忠実な僕どもを責め苦から守り給えと心から神に祈る。それから聖なる司祭は右手をかかげ、<sup>208</sup>彼ら全てを祝福した。

神の僕たちは帆柱を立て、帆を張ると、直ちに出発する。<sup>212</sup>風が東から来て、彼らを西へと導く。海と雲以外何も見えない。順風にかかわらず彼らは怠けず一生懸命漕ぐ。<sup>216</sup>目的地を見ようと、身体を酷使することを望む。そうして彼らは<sup>220</sup>15日間風が止むまで走った。風が止んだので、修道士たちは皆恐怖を覚えた。大修道院長は、<sup>224</sup>決して勇気を失わないようにと彼らを励ます。「神の慈悲に身を委ねよ。そうすれば恐れるものはないはずである。<sup>228</sup>風があるときは風にまかせて走り、風がないときには、そのときこそ漕ぐのです。」そこ

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

で彼らは懼で漕ぎ始める。彼らは神の恩寵を懇願する。どちらに行けばよいのか、<sup>232</sup>どの綱を引けばよいのか、舵をどちらに取ればよいのか、どの方向に進むべきか、またどちらに航路を取るべきかわからないからである。丸ひと月風がないまま、<sup>236</sup>修道士たちは誰ひとり不平を言わず漕いだ。食料が続く限り、一生懸命働くことができた。力が尽きた。その上<sup>240</sup>食料も。それゆえ彼らは大きな恐怖に襲われた。

神は、忠実な僕が大いに必要とするとき彼らの傍におられる。だから人間は信仰を失ってはいけ<sup>244</sup>ない。神を求めて旅を始める者は全力を尽せ。そうすれば神がその人に必要なものを見つけ給う。

大きく、高い陸が彼らの目に入った。<sup>248</sup>風が起り、吹き続けた。漕ぎ疲れていた者たちは苦もなくそこに運ばれた。しかしそこには<sup>252</sup>彼らの舟が停泊できるような入口がひとつも見つからない。岩が迫っているので、彼らは誰も入ろうとしなかった。山々は高く空中にそびえ、<sup>256</sup>海上はるか先まで垂直に張り出している。海底のくぼみから海が巻き上る。それゆえ危険は大きい。彼らは至る所港を<sup>260</sup>捜した。それを見つけるのに3日を費した。彼らは白い石灰石に切り込まれた港を見つけ、そこに入った。<sup>264</sup>港は灰色の岩の中に作られ、そこには舟一隻分の場所しかなかった。彼らは舟をつなぎ、全員外に出る。彼らは道をたどり、その道が彼らを正しく導く。それは彼らを真っ直ぐ城へと案内した。<sup>268</sup>その城は見事であった。美しく、大きく、王の領地あるいは皇帝の大きな地所のようにであった。彼らは城壁の中に入った。<sup>272</sup>その壁は全て固い水晶でできていた。大理石のみで作られた宮殿が見えた。木の館は<sup>276</sup>なかった。壁に嵌め込まれた宝石が金と共に大きな輝きを放っている。しかし彼らの気に入らないことがひとつあった。その町にひとりも人間がいないことである。彼らは高<sup>280</sup>い宮殿を見上げ、平和の名において中に入る。

ブランダンが宮殿の中に入り、それから腰掛けに坐った。彼の一行以外誰もそこには<sup>284</sup>なかった。ブランダンは話を始め、彼らに言った。「我々に必要なものがあるかどうか料理場に<sup>288</sup>捜しに行きなさい。」彼らは行き、最も望んでいたものを見出した。それは大量の食料、<sup>292</sup>飲物、そして大そう美しく立派な金銀の食器の蓄えであった。彼らが入った所には、彼らが望んでいたものが全て十分にあった。大修道院長が彼らに言った。「私たちの<sup>296</sup>ところにそれを持って来なさい。しかし取りすぎないように。それは禁じておく。そして各々自分のために神に祈りなさい。神に対し信仰を偽らないためである。」このことにより大修道院長は修道士たちに警告しておきた<sup>300</sup>かった。何が起るかをすでに知っていたからである。彼らはたくさん食料を持っていくが、必要以上には取らなかった。好きな<sup>304</sup>だけ、必要なだけ彼らは食べた。彼らは神を称えることを忘れず、神の慈悲を乞うた。彼らは大胆にもそこに宿泊する。時間がくると彼らは休みに行った。

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

全ての者が眠ってしまったとき、突然サタンが現われひとりを誘惑した。<sup>312</sup>そして目の前に積み上げられている金をこっそり取ろうという欲望を吹き込んだ。大修道院長は眠らず、とくと見ていた。どのように悪魔が盃を差し出したかを。その男は起き上り、<sup>316</sup>財宝の中で最も見事なその盃を取りに行った。それからこっそり素早くそれを持ち帰った。盗みを働いた後、<sup>320</sup>彼は寢床に戻り眠った。大修道院長は休んでいた場所から全てを見た。夜中にこの修道士がどのようにさ迷ったかを見た。それは闇の中であつたが、<sup>324</sup>ろうそくなしで全てを見た。神が彼に見せたいと思うとき、ろうそくを点す必要はないのである。丸3日の間<sup>328</sup>彼らはそこにとどまった。そして4日目に出発した。

ブランダンが彼らに言った。「諸君、私はあなた方に告げる。ここから何も持ち出してはいけない。この貯えの中から少しでも、<sup>332</sup>また渴きのための水でさえ。」彼は激しく泣きながら修道士たちに言った。「見よ、諸君、この者は盗人である。」その男は、大修道院長<sup>336</sup>が盗みを知っていたこと、そして彼がどのようにそれを手に入れたかを知っていたことを理解した。彼は皆の前で告白し、大修道院長の足元で慈悲を待つ。ブランダンが彼らに言った。「彼のために祈りなさい。<sup>340</sup>彼は今日あなた方の目の前で死ぬでしょう。」すると全員の目前で悪魔が叫びながらとび出した。「教えてくれ、<sup>344</sup>ブランダンよ、なぜお前は私を住み処から追い出すのだ。」ブランダンはその修道士に言うべきことを言い、彼を許し、赦免した。彼が聖体を拝領するや否や、<sup>348</sup>全員の目の前で死が彼を捕えた。魂は天国に行き、神が彼を大いなる休息の中に置かれた。修道士たちは彼の体を埋葬し、<sup>352</sup>彼の世話をしてくれるよう神に祈る。それは教父が舟の中に受け入れた3人の修道士のひとりであつた。

彼らは海岸の港に<sup>356</sup>来た。するとすぐに1人の使者が現われた。彼らにパンと飲物を運んできて、それを受け取ってくれるよう頼む。それから彼らに言った。「安心せよ、<sup>360</sup>恐れることはない。神があなた方に多くの幸をもたらし、<sup>364</sup>偉大なる神の徳によりあなた方は求めるものを見るでしょう。食料に関しては、ここにたくさんないからといって心配するには及ばない。それは、あなた方がある場所に着くまで不足することはなく、<sup>368</sup>そこではもっとたくさん手に入るでしょう。」彼は深々とお辞儀をし、彼らに食料を渡し、それ以上何も言わずに立ち去った。

さて彼らが見たものは神の使いであつた。<sup>372</sup>彼らが神の命により旅をしているからである。そしてその出現が奇跡によることを彼らは確認した。神が彼らを養い給うことをよく理解した。<sup>376</sup>黙して神を称えない者はひとりもいなかった。彼らは風にのり航海する。止まらず前進する。神の加護は彼らのすぐ傍にある。ほとんど1年中海上を走り続け、<sup>380</sup>彼らは見事に疲労を忍ぶ。彼らの望み通り地平線に陸が姿を現わし、彼らはそれを見る。舟をその方向に向け、<sup>384</sup>すぐに漕ぎ出さない者はいない。彼らは綱をゆるめ、帆を下ろし、接岸すると飛び降りる。彼らは羊の大群を見る。<sup>388</sup>いずれも白い毛で被われ、かの荒野に住む雄鹿のよ

アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

うに大きかった。大修道院長が彼らに言った。「諸君、<sup>392</sup> 3日目まで我々はここにとどまる。今日は神の子が苦悩を耐えられた聖木曜日の最後の晩餐の記念の日である。彼は我々をすみやかに運び、<sup>396</sup> 必要なものを満たしてくれるやさしい友であるので、我々はそれを使って彼のために祝うことができる。舟を引き上げることを考えよ。これらの羊の中から一頭を取り、<sup>400</sup> 復活祭の日<sup>バック</sup>に用意せよ。ここには他に誰もいないので、神にその許しを求めよう。」

彼らはブランダンが命じたことを実行した。<sup>404</sup> 彼らは3日間そこに滞在する。土曜日に1人の使者がやって来た。神に代り使者は彼らに挨拶する。その髪は白く、眼は若々しい。<sup>408</sup> 彼はどんな危険にも会わず長生きをした。彼は自分の土地から彼らにパンを持って来た。パン種を入れない、大きい真白のパンであった。そして、もし彼らに何か足りないものがあれば、<sup>412</sup> 何でも見つけてあげようと固く約束する。大修道院長がそこはどういう場所であるのかを尋ねると、彼は、故意か否かはわからないが、それについて多くを語らず、こう答えた。<sup>416</sup> 「我々は我々の考えが及ぶ限りのものを持っている。」すると大修道院長が言った。「ここには羊がいる。私は如何なる場所でもこれほど大きい羊を見たことがない。」使者が答える。<sup>420</sup> 「驚くにはあたらない。ここでは羊は決して乳を搾られたことがない。厳しい冬<sup>424</sup>も、病気も死もない。ブランダンよ、舟に入り、あそこに見えるあの島に行きなさい。今晚あの島に入り、明日そこで復活祭を祝い、明日の夜そこから戻るのです。<sup>428</sup> なぜそんなに急いで？その理由は間もなくわかるであろう。それからあなた方は、この岸のすぐ傍を走って無事に戻り、別の場所に行くのです。<sup>432</sup> 私もあるあなたの方の後を追ってそこに行く。このすぐ近くで私はあなた方に再会するであろう。あなた方にたくさんの食料を持って行く。」

ブランダン<sup>436</sup>は彼にさからわず舟を出し、くっきり浮んでいる島に向う。神のおかげで風があり、またたく間にそこに着いた。しかし彼は非常に広大な海を横断した。神に導かれる者はこのように進むのである。<sup>440</sup> 彼らは難なく上陸する。修道士たちは全員舟をおりる。<sup>444</sup> 大修道院長だけ中に残った。彼らは昼夜心のこもったすばらしい勤めを行う。教会と同じように舟の中で勤めを終えた後、<sup>448</sup> 積んできた肉をそこで料理するため舟から取り出した。彼らは薪を捜しに行き、<sup>452</sup> 地面で食事を作る。用意ができたとき、まかない係が言った。「さあ坐って下さい。」そのとき彼らは大声で叫ぶ。「ああ、大修道院長様、待って下さい。」<sup>456</sup> というのは大地が動き、舟からどんどん遠ざかって行ったからである。大修道院長が言った。「恐れず、神を求めよ。食料を全て持ち、舟に、<sup>460</sup> 私のところに戻りなさい。」ブランダン<sup>464</sup>は彼らに棒と長いロープを投げる。然う斯うするうちに彼らの衣服が濡れる。全員が舟の中に入った。一方彼らのいた島は非常に早く逃げ去り、その島で彼らがおこした火が10里先にはっきり見えた。<sup>468</sup> ブランダンは彼らに言った。「修道士諸君、なぜあなた方が恐れたかわかりますか。我々が祭を行った場所は島ではなく獣であった。海で最も大きい魚の上

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

であった。<sup>472</sup>諸君、このことに驚いてはいけない。神があなた方をここに連れて来ることを望んだのは、あなた方にもっと分別を与えるためであった。あなた方は彼の驚異を多く見れば<sup>476</sup>それだけ彼を信じるようになるであろう。王なる神が全ての魚を作る前に、最初<sup>480</sup>にあれを作られたのである。」

ブランダン大修道院長はこう言い終ると、かなりの距離を航海した。すると高く<sup>484</sup>聳え、明るく輝く陸が見えてきた。あの修道士が言った通りであった。彼らはそこに早く着いた。彼らは上陸を避けることも、他のことを恐れもせず、舟を陸に押し上げる。<sup>488</sup>綱で舟を引きながらゆっくり小川を逆のぼっていく。小川をのぼりつめたところに一本の木があった。それは大理石のように白く、大変広い葉には赤と白の斑点がある。<sup>492</sup>その木の高さはといえ<sup>496</sup>ば、見たところ、雲の上までのびていた。空中に広く張り出した枝が、梢から地面まで木をぎっしり被い、遠くまで陰を投げかけ光を奪う。白い小鳥たちがとまっている。<sup>500</sup>今までこれほど美しい小鳥たちを見た人間はいない。

大修道院長は驚き、彼の助言者である神に祈る。それが何であるか教え給え。<sup>504</sup>こんなに多くの小鳥は何を意味するのか、彼がやって来たのはどんな場所なのか、彼の徳に免じそれについて教え給えと祈る。彼が祈り終えたとき、<sup>508</sup>小鳥たちの中から一羽が舞いおりてきた。鐘の響きのように飛翔がやさしくかなでる。それが舟の上にとまったとき、<sup>512</sup>ブランダンはやさしく、おだやかに話した。「もしお前が神の創造物であるなら、私の言うことを注意してお聞き。まず私に、お前が何者であるのか言っておくれ。何のためにお前たち、<sup>516</sup>お前と他の小鳥たち全てはこの場所にいるのか。というのはお前たちは私には大そう美しく思えるからである。」小鳥が答える。「我々は天使である。<sup>520</sup>かつて我々は天にいた。ところが高慢で恥知らずの者と共に高みから非常に低い所に落ちた。彼はうぬぼれから主を裏切り、<sup>524</sup>主に対し立ち向った。彼は長として我々の上に置かれ、神の徳で我々を養わなければならなかった。彼は<sup>528</sup>大いなる知恵の持ち主であったので、我々は彼を長としなければならなかった。彼はうぬぼれにより大いに反逆的で、神のことばを軽蔑した。彼がそれを犯した後も我々は彼に仕えた。<sup>532</sup>以前同様、従った。それゆえ我々はこの真実の王国の相続権を奪われたのである。しかしこのことは我々が企てたものではなかった<sup>536</sup>ので、我々は神からこれほど大きい徳を受けている。我々は彼と共に自惚れた者たちほど大きい刑罰は受けていない。我々が受けている刑罰はこれだけである。<sup>540</sup>すなわち、我々は神の威厳、栄光の存在、そして神の前にいる喜びを失った。あなたが尋ねたこの島の名は、それは『小鳥たちの天国』である。」さらに小鳥は彼らに言った。「さて、あなた方は1年前から海の苦勞を耐えてきた。<sup>548</sup>あなた方が天国に至るまであと6年残っている。あなた方は大洋および至る所で多くの苦悩や不幸を耐え、<sup>552</sup>毎年あの獣<sup>バックス</sup>の上で復活祭を祝うのです。」

## アングロ・ノルマン版「ブランデンの航海」試訳

こう言い終えると、小鳥は飛んできた木の方に立ち去った。日が終りに近付いた時、<sup>556</sup> 晩方、小鳥たちは賛歌を歌う。やさしい声で、声高く叫び、賛歌の中で神に感謝する。追放の身にかかわらず、<sup>560</sup> 今彼らは修道士たちの訪問という慰めを与えられている。崇高なる王は未だかつて人間をそこに送られたことがなかった。そこで大修道院長が言った。「あなた方は聞きましたか、<sup>564</sup> この天使たちがどれほど我々を歓迎してくれているか。神を称え、感謝しなさい。神はあなた方を、あなた方が求める以上に愛しておられる。」彼らは舟を水路に残し、<sup>568</sup> 岸で食事をした。それから壮厳な詩篇朗唱法にのっとり終課を歌う。そして全員床に就き、<sup>572</sup> イエスに身を委ねる。多くの危険をくぐり抜けてきたので疲れ果てて眠る。しかし一番鶏の歌と共に彼らは夜明け前の朝課を唱える。彼らと共に、小鳥たちの合唱がルフランで答唱する。<sup>576</sup>

夜明けとともに、日の光の中から突然神の忠実な従者が現われた。彼らに道を教え、食料をくれたあの使者であった。使者は彼らに言った。「食料は、<sup>584</sup> 私があなた方にたっぷり見つけてあげよう。あなた方は聖霊降臨祭の8日目にたくさんの食料を、しかも簡単に手に入れるであろう。疲労の後には休息の場が必要である。あなた方は2カ月ここにとどまるのです。」彼は別れを告げ、立ち去った。そして3日目に戻ってきた。必ず週に2度、<sup>592</sup> 彼は一行を訪れた。彼らは彼のことば通りに行動し、彼の導きに従った。出発の時が来ると、<sup>596</sup> 彼らは（水がもらえないよう）舟を締めつけ始める。牛皮で舟を被い縫う。すでにあるものは完全に擦り切れているからである。舟を完璧にし得るほどたくさんの予備があった。<sup>600</sup> 食料不足で死なないように、彼らはあらゆるものを十分補充する。使者は、<sup>604</sup> 彼らが望むだけ、彼らにパンと飲み物を与えた。彼は丸8カ月を予定した。その舟はそれ以上の重さに耐えられなかった。接吻し合っ<sup>608</sup> て別れを告げ、彼らは出発する。使者ははげしく泣きながら、行くべき方向を彼らに示した。そのとき突然あの小鳥が帆の上にとまった。<sup>612</sup> 小鳥はブランデンに出発せよと言った。さらに、彼は長い航海をし、多くの試練を耐えなければならない、つまりアルベウの島に到着し、上陸できるまで8カ月待たなければならない、そして<sup>616</sup> 彼らはそこに神の<sup>ノエル</sup>誕生日に着くであろうと言った。鳥がそう言い終ると、ブランデンはもはや猶予せず、<sup>620</sup> 舟は風に乘って出発する。

彼らは神にこれほどの順風を感謝しつつ、海上を全速力で帆走する。風が強くなり、たびたび<sup>624</sup> 彼らは危険や苦悩を恐れる。4カ月後に陸が見えたが、彼らは大いに奮闘しなければならなかった。しかしついに6カ月目にそれも終った。彼らは上陸しようとするが、<sup>628</sup> 今度は入口をどこにも見つけることができない。彼らは40日間その周囲を回って、<sup>632</sup> ようやく港に入った。陸には岩や大きな山が彼らの前に立ちはだかっていたからである。ついに<sup>636</sup> 彼らは、ひとつの小川が作り出した裂け目を見つけた。彼らはそれを利用する。舟を上流に



引き上げた修道士たちは疲れたので休息する。それから大修道院長が言った。「外に出て、<sup>640</sup>身体に必要なものを捜しに行こう。」ひとりずつ全員が舟の外に出る。大修道院長も仲間と共に出る。彼らは二つの泉を見つける。<sup>644</sup>ひとつは澄み、ひとつは濁っている。のどが渴いていたので、彼らは泉の方に走って行く。大修道院長が彼らに言った。「我慢せよ。そんなに急いで飲んではいけない。住民と話すまでは、我々が見つけたこの小川がどのような性質のものかわからない。」<sup>648</sup>彼らは大修道院長のことばを恐れ、<sup>652</sup>非常に大きな渴きを耐える。間髪を入れず、直ちに、1人の大きな老人が走って来る。その男が僧服を着ていなければ、<sup>656</sup>彼らは恐れたであろう。彼は修道士であった。しかし何も言わずブランダン<sup>660</sup>の足元に跪く。ブランダンは彼の手を取り、立たせる。老人は深く、恭々しくお辞儀をする。彼は<sup>664</sup>大修道院長と修道士全員に接吻し始める。それからブランダンの右手を取って、彼を自分の住居に案内する。大変すばらしい場所を見に来るよう、他の者たちに合図で示した。途中歩きながら、大修道院長が、彼らが今いるのはどのような場所であるかと尋ねた。しかし彼は口を閉ざして答えないまま、<sup>668</sup>彼らを手厚くもてなした。進むにつれて、目的の場所が見えてきた。それは美しく、立派な修道院であった。<sup>672</sup>天下にこれほど聖なるものはない。この地の大修道院長が、聖遺物と宝物を持ち出させる。<sup>676</sup>アメジスト<sup>アメジスト</sup>。紫水晶をちりばめ、金と純粹の宝石で飾られた十字架、聖遺物箱、福音書、そして、<sup>680</sup>宝石を嵌め込んだ金の丈夫な香炉等。衣服は全て金で刺しゅうが施されていた。アラビアにさえ、それほど黄金色に輝くものはない。<sup>684</sup>大そう大きく完全な風信子石と紅縞めのうがつけられている。<sup>688</sup>黄玉や碧玉が嵌め込まれた止め金がきらきら輝いている。全ての修道士が祭服を着て、大修道院長と共に外に出ていた。彼らは喜びを満面にたたえ、列を作ってゆっくり進む。そして全員が接吻し終ると、<sup>692</sup>各人他の者の手を取り、案内する。彼らはブランダンとその仲間を修道院に導いた。彼らは小規模ではあるが立派な勤めを行う。<sup>696</sup>余り仰々しくすることを彼らは望まなかった。それから彼らは大食堂に食事に行く。そこでは朗読者以外は沈黙する。彼らの前には一つずつ甘く白いパンがある。<sup>700</sup>それは香が高く健康に良い。料理として根菜が出される。上等の料理以上に彼らはそれらに満腹する。それから彼らはすばらしい香の飲物を飲む。<sup>704</sup>それは密入り葡萄酒より甘い水であった。彼らは食事を終えると立ち上り、詩篇を朗唱しながら修道院に行く。ほとんど全ての修道士がミゼレーレを歌いながら<sup>708</sup>聖歌隊席横の椅子まで歩いて行く。給仕をした者たちは大食堂にとどまる。

小さな鐘が鳴り、<sup>712</sup>時課が歌われた後、土地の大修道院長が彼らを外に案内する。彼は自分たちとその土地についてブランダンたちに語る。彼らが誰で、どうやって、いつからそこにいるのか。誰の、あるいは誰から援助を受けているか。「我々は24人であり、この構内に住んでいる。<sup>716</sup>巡礼・聖アルベウが死んで80年になる。彼は多くの封土を所有する権力者であったが、この場所のために全てを放棄した。彼が秘かに隠遁したとき、<sup>720</sup>神の使いが現われ、彼を導いた。彼はこの場所が、まだここにあるこの修道院が用意されているのを<sup>724</sup>

## アングロ・ノルマン版「ブランダンの航海」試訳

見出した。<sup>728</sup>ここに敬虔なるアルベウが住んでいると聞くと、我々は神に導かれて様々の場所からここに集った。我々は彼を大変愛していたからである。彼が生きている間、我々は彼に仕え、<sup>732</sup>大修道院長に対するように従った。彼が我々に修道院規律を教え、我々の任務を定めてしまうと、神は御自分の傍に彼を召された。<sup>736</sup>彼が死んでから80年になる。神がその後我々を支えてくれるので、我々にはどのような禍いも到来しない。我々の身体には如何なる不具も、<sup>740</sup>苦痛も、痛みも起らない。我々が手にする食料は全て神から来る。我々他<sup>744</sup>のものは知らない。我々には誰も持ってくる者はいない。我々には持って来る者は見えない。それにもかかわらず、注文しなくても毎日、必ず就業日には2人の間にパンがひとつ用意され、祭日には私は夕食に私のパンを、そして各人が一つずつ自分のパンを与えられる。そしてあなた方が見て、<sup>752</sup>ほとんど飲みそうになった二つの小川のうち、明るい方は冷く、我々はそれを飲料とする。濁っている方は熱く、洗い物に使用する。我々が時課を唱えなければならぬとき、<sup>756</sup>我々のランプに火がともる。この火は燃焼するにかかわらず、ろうも油も消耗しない。火はひとりでにつき、ひとりでに消える。<sup>760</sup>我々の中にはそれにたずさわる者はいない。我々はここで何の心配もなく暮している。苦しみは全くない。我々があなた方の到来を知る前に、<sup>764</sup>神は我々があなた方の食料を持つことを望んで、それをいつもの二倍にされた。神があなた方を歓迎しておられることが、私にはよくわかる。<sup>エピファニー</sup>公現の祝日から8日目に、そのときはじめてあなた方はここから去るのです。そのときまであなた方はここに滞在し、そのときになってはじめて出発するのです。」そのときブランダンが言った。<sup>772</sup>「これほどいとしい場所はない。ここにとどまればうれしいのだが。」大修道院長が答えた。「あなたはある目的のために国を去った。それを捜しに行きなさい。その後<sup>776</sup>は国に帰り、あなたが生まれた場所で死ぬのです。今から1週間後、<sup>エピファニー</sup>主の公現の祝日の8日目に出発しなさい。」

大修道院長が定めた日が来ると、<sup>780</sup>ブランダン<sup>780</sup>は彼に別れを告げた。1人の大修道院長がもう1人の大修道院長を、そして彼と共に他の修道士全員を案内する。彼らは海に出る。神のおかげで風がある。<sup>784</sup>その風が彼らをアルベウの島から運び去る。非常に長い間海上を走ったが、<sup>788</sup>陸の徴は全くない。風と食料が尽き、激しい飢えと焼けるような渇きが増した。海は余りにも穏やかで、それゆえ航海は非常に苦しかった。海はまるで沼のように濃厚であった。<sup>792</sup>舟にはもはや救われないと考える者もいた。神が嵐によって彼らを救った。陸と岸が見えた。<sup>796</sup>飢えた者たちは、そこに行くべく神によって定められていることをよく知っている。彼らはまるで自分たちのために作られたような入口を見つける。彼らは澄んだ小川を見つけた。そこには魚がおり、<sup>800</sup>彼らは100匹以上つかまえた。沼地に生えている草は彼らに有益である。大修道院長が彼らに言った。<sup>804</sup>「気を付けよ。際限なく飲みすぎないように。」<sup>804</sup>彼らは渇きのまま水を飲み、大修道院長のことばに従わなかった。それから彼

らは余りにも多くの水を秘かに飲んだので、愚か者と呼ばれた。睡魔に襲われ、横になって眠ってしまったからである。飲み過ぎた者たちは身を傾けて、ある者は1日、ある者は2日、ある者は丸3日横たわっていた。ブランダン<sup>812</sup>は修道士たちが完全に酔っているのを見て、彼らが正気に返るまで、彼らのために祈った。全ての者が自分たちの愚かさを認め<sup>816</sup>た。大修道院長が彼らに言った。「もはや忘却に陥らないよう、ここから逃げよう。神と<sup>820</sup>神への祈りを忘れるよりも正直な飢えを忍ぶ方が良い。」

彼らは海に出て、洗足木曜日には去年いた土地に戻った。彼らをもてなしてくれたあの白髪の老人がそこに現われ、彼らのために港に天幕を張った。彼は、疲労した旅人たちをそこで祝福し、新しい僧服を用意した。彼らは聖書に書いてある通りに聖餐式と洗足の儀式を行う。彼らは3日目までそこにとどまり、土曜日に出発する。彼らは海を横切り魚のところに行く。大修道院長は彼らに言った。「外に出よう。」<sup>832</sup>彼らが前の年に失った鍋がそこにあった。大魚がそれを保っていた。今彼らはそれを再び彼の背の上に見出した。彼らはこの前より安全に彼の背にとどまり、<sup>836</sup>すばらしい祭を行う。祝いは夜を通し朝まで続いた。彼らは復活祭を祝う。彼らは時間を忘れず、正午を過ぎると、さっさと舟に荷物を戻した。<sup>840</sup>

聖人はすぐさま出発し、前に訪れた小鳥たちの島に向かい舟を走らせる。あの白い木が、そして枝には小鳥たちが見えた。<sup>848</sup>小鳥たちが彼らを歓迎する声が遠くの海から聞こえてきた。巡礼たちが到着するまで歌い止めなかった。彼らは、川の上流の以前停泊したところに舟を引き上げる。彼らのホストが現われ、天幕を張る。彼は舟に食料を一杯積んで持ってきて来る。そして彼らに言った。「あなた方はしばらくここに滞在します。あなたのお許しがあれば、私は去ります。あなた方は聖霊降臨祭の8日目まで、心おきなくここにとどまるのです。何も恐れてはいけません。私は必ず来て、必要な時にはあなた方を助けますから。」<sup>852</sup>彼らは鎖で舟を固定し、そこに7週間滞在する。出発の日が来ると、小鳥たちの中から一羽が舞いおりてくる。輪を描いて舵の上にとまった。ブランダンはその小鳥が話したがつているのを理解し、<sup>856</sup>各人に黙るよう言った。「諸君」と小鳥が言う。「7年の間毎年、あなた方はこの休憩場所に戻ります。毎年神の誕生日にはアルベウの島に滞在し、そのうちあなた方のホストが命じた場所で復活祭の聖餐式と洗足式を行うのです。そして毎年獣<sup>860</sup>の上で復活祭を祝うのです。」<sup>864</sup>そう言い終ると、小鳥は降りてきた木の方に飛び去った。舟は深い海の上を漂う。どの修道士もホストを待み望む。彼は遅れずやって来た。彼の舟は食料を積んでやって来る。そして彼は自分の舟から彼らの舟に大切な食料を積みかえる。<sup>868</sup>それから彼の仲間たちを守ってくれるよう聖母マリアの子に祈る。彼らは戻ってくる日を定める。<sup>872</sup>出発のとき、彼らは涙を流す。

彼らは順風の中を快走する。風は彼らを東へと運ぶ。海が眠り、死んだようになった。

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

<sup>896</sup>帆走が困難になった。<sup>900</sup>45日間走った後、彼らは非常に大きな恐怖に襲われ、血が凍るような思いをした。彼らの舟が大きく揺れたのである。嵐のため舟は彼らを乗せたままもう少しで転覆しそうになる。それから、<sup>904</sup>彼らが耐えてきた如何なる苦悩より恐ろしいことが起った。彼らの方に一頭<sup>908</sup>の海蛇がやって来る。風より速く追いかけてくる。彼が吐く火は大きなまどの中の薪のように明るく燃える。炎は大きく、非常に熱いので、彼らは死を恐れる。その身体は途方もなく大きく、<sup>912</sup>15頭の牡牛より大きい声で鳴く。仮に危険なのは歯だけであつたとしても、大勢の人が逃げたであろう。彼が立てる波は大きな嵐に匹敵した。<sup>916</sup>蛇が彼らに近付いたとき、真の『神の人』であるブランダンが言った。「諸君、恐れてはいけない。神があなた方の仇を取ってくれるであろう。理性を失った恐怖により、神と恩寵を忘れないように気を付けよ。神が守り給う者は、<sup>924</sup>吠える獣を恐れるべきではない。」こう言い終ると、神に祈った。彼が祈ったことはすぐになえられた。もう一頭の獣が現われるのが見えた。<sup>928</sup>それが蛇と対戦するに違いない。蛇が舟に向って直進するので、後から来た方が怒って吠える。蛇は敵に気付く。<sup>932</sup>舟をあきらめ、後退する。二頭の獣はぶつかり合う。両者、頭を高くもたげ、鼻孔から火を吹き出す。<sup>936</sup>火は高く雲まで飛んで行く。盾のような<sup>ひれ</sup>鰭と足で殴り合う。<sup>940</sup>槍のように鋭い歯で噛み、傷つけ合った。この巨大な身体につけ合った鋭い噛み傷から血が吹き出す。傷は大そう深く、<sup>944</sup>波は血に染る。戦いはすさまじかった。海は騒然となった。後から来た方が勝ち、<sup>948</sup>蛇を死に至らしめた。歯で強く引っ張り、<sup>952</sup>蛇を三つに引き裂いた。仇討ちを遂げると、彼は戻って行った。

神があれほどすみやかに食物と衣服を与え、危機に直面したときあれほど救いをもたらし、<sup>956</sup>何度も死から逃れさせるのを見るとき、人は絶対に絶望してはいけない。<sup>960</sup>むしろもっと信仰を強くしなければならない。大修道院長が彼らに言った。「他のことは全て放っておこう。人はこのような神によく仕えなければならない。」彼らは進んで答える。「我々は、神が私たちを深く愛して下さることを知っている。」その翌日彼らは陸を見る。<sup>964</sup>無事にそこに着けると考える。非常に早く着き、疲れた身体を休めるため外にとびおりる。草地に天幕を張り、<sup>968</sup>舟を乾いたところに引き上げる。彼らが上陸すると嵐がやってきた。ブランダンは、雨模様の空により、<sup>972</sup>天気が悪くなることを知った。風が吹き上げ、彼らを打ち、食料が尽きた。しかしどのような危機に遭遇しようとも、<sup>976</sup>彼らは恐れなかった。大修道院長があれほど彼らに説教をし、神が至る所で多くを与え給うたので、<sup>980</sup>旅の間彼らは如何なることによっても少しも信仰を失うことはできなかった。その後間もなく、魚（<sup>誤</sup>さきほどは蛇であつた）の3分の1切れが流れ着いた。海の波がそれを押し、<sup>984</sup>彼らのために岸に打ち上げた。彼らの飢えを静めるため、嵐がそれを岸に押しやった。そのときブランダンが言った。「見なさい、<sup>988</sup>諸君。かつてあなた方の敵であつたものが、今、神の恩恵により我々を救う。それは長い間我々の食料となるであろう。何も恐れることはない。<sup>992</sup>それがど

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

んな外形であろうとも、我々の食料となるであろう。3 カ月以内にそれが尽きないよう、よく考えて取りなさい。」彼らは命令通り、<sup>996</sup>その期間の分量を貯えた。樽を泉の水で満たし、薪を貯えた。<sup>1000</sup>風が吹き始めると、彼らは出発した。

神は奇跡を行うことを止めない。あらたな危機が彼らを苦しめる。この危機は、もしそれが最初であったなら、(最初のものに)劣らず、むしろ勝っていたであろうに。しかし彼らが神により抱いている覚悟と神の守護のゆえに、彼らは恐れなかった。<sup>1004</sup>鳥獣が火を吐きながら空からおりてくる。<sup>1008</sup>彼らをつかまえようと爪をのばす。火炎のような頬と非常に鋭い足がせまる。<sup>1012</sup>その爪の一撃でもぎ取られないほど頑丈な舟の舷はない。その激しさと、<sup>1016</sup>彼が起す風だけで舟は傾きそうになる。このように彼らが海で追いかけられていたとき、<sup>1020</sup>一頭の竜が非常に明るい火を吐きながら現われた。翼を動かし、首をのばし、<sup>1024</sup>鳥獣に向かって飛んで行く。空中戦が行われる。二頭の吐く火があたり一面を照らす。彼ら全員の目の前で、二頭は打ち合い、火を吐き、噛みつき、押し合う。<sup>1028</sup>鳥獣は大きく、竜は細い。鳥獣の方が力が強く、竜の方が激しい。<sup>1032</sup>鳥獣が死に、海に落ちた。鳥獣を恐れていた者たちはそれによって報われた。竜は勝利をたずさえて立ち去る。修道士たちは神の栄光を称える。彼らはそこを離れ、前進する。神の聖霊により、彼らは確信している。

<sup>1032</sup>ネロの庭で殺された聖ペテロの祭日がやってきた。修道士たちは彼の祭日を祝い、使徒ペテロの栄光を称える。<sup>1036</sup>大修道院長は勤めを行い、規定どおり非常に大きな声で朗々と歌った。そのとき全ての修道士たちが言った。「教父様、もっと小さい声で歌って下さい。<sup>1040</sup>さもないとあなたは我々を死なせることになるでしょう。波は澄み渡り、海は深いのに底まで、<sup>1044</sup>しかもあんなに多くの魚がうごめいているのが見えるからです。前代未聞の、大きくて獰猛な魚どもが見えます。もし大きな音をたてて彼らを刺激すれば、<sup>1048</sup>いいですか、我々は死ななければならないでしょう。」大修道院長は微笑んで彼らを咎め、彼らを愚かであると思う。「諸君、なぜあなた方は恐れるのか。あなた方はあなた方の信仰から離れているからである。あなた方はもっと大きい危険を乗り越えてきた。あなた方全てに対し、<sup>1052</sup>神は良き保護者であった。今回の危険はまだあなた方に起ってさえいない。<sup>1056</sup>罪を認めよ。」とブランダン<sup>1060</sup>は彼らに言い、さきほどより大きな声で高らかに歌った。海から荒々しい獣たちがとび出し、その日の祭を祝いながら舟の周囲を回る。彼らがその日の勤めを歌い終ると、魚たちはそれぞれ戻って行った。

彼らは前進する。<sup>1064</sup>すると沖に大きな柱が立っているのがはっきり見えた。それは純粹のジャーゴン石でまざり物はなく、<sup>1068</sup>サファイア色であった。その持主がいるとすれば、その人は富者であるに違いない。それは上は雲まで、下は海底までのびていた。周囲には天幕

## アングロ・ノルマン版「ブランダンの航海」試訳

<sup>1072</sup>が張られている。それは天辺から海まで垂れ下り、繊細な細工を施された貴金で作られて  
 いる。全世界と引き換えでも、それを作ることはできないであろう。ブランダンはその  
 向って舟を走らせる。<sup>1076</sup>その傍に行くのが待ち遠しく感じられる。帆を張ったまま舟ごと、  
<sup>1080</sup>修道士と共に天幕の中に入る。柱が海と接する所にエメラルドの祭壇を見た。小礼拝堂は  
<sup>1084</sup>紅玉髓、敷石は玉髓であった。柱の中に純金の梁が固定され、小礼拝堂を支えている。  
<sup>1088</sup>そしてランプは緑柱石。彼らは如何なる危険も恐れない。3日目までそこに滞在し、全員  
 が順番にミサを歌う。神の秘密を求めてはいけない、とブランダンは内心考える。彼は修  
<sup>1092</sup>道士たちに言った。「私の分別を信ぜよ。ここを出よう。出発しよう。」大修道院長はすば  
<sup>1096</sup>らしい水晶の聖杯を取る。それで神に仕えるためにそれを持ち去るときには、神から離れ  
 るのではないことを彼はよく知っている。

巡礼たちはかなりの距離を航海した。しかしまだ終りを知らない。それでも彼らは怠け  
<sup>1100</sup>ない。進めば進むほど、努力する。望むものを見るまでは、努力することをあきらめない。  
<sup>1104</sup>彼らの前に、黒い蒸気と雲に取り囲まれた陸が現われた。それは臭い、腐った死骸より臭  
<sup>1108</sup>い煙を吐き出し、闇に被われていた。彼らはそこで休息したいとは思わない。そこでは歓  
<sup>1112</sup>迎されないことを、遠くにいながら理解した。彼らは他の場所に向おうとするが、その方  
 に進まなければならなかった。風が彼らを導いたからである。大修道院長は彼らを諭し、  
<sup>1116</sup>言った。「あなた方は地獄に押しやられているということを承知しておきなさい。今ほど  
 神の守護を多く必要とすることはかつてなかった。」ブランダンは十字を切って彼らを祝  
<sup>1120</sup>福した。地獄の井戸に近いことをよく知っているからである。彼らが近付くにつれて、災  
<sup>1124</sup>いが見えてくる。もっと暗い谷が目に入る。深い谷と穴から、巨大な金属板が燃えながら  
 飛び交う。ふいごから送られる風がうなる。雷でさえそれほど大きい音では鳴らない。火  
 花を散らす金属板や燃える岩、そして炎がその空に余りにも高く飛び上り、昼間の明るさ  
 を覆ってしまう。

<sup>1132</sup>修道士たちはその山に近付いたとき、悪魔を見た。それを恐ろしいと思った。その悪魔  
<sup>1136</sup>は巨大で、真赤に燃えて地獄から出てきた。手には鉄のハンマーを持っている。それは柱  
 として使える位大きかった。彼らの存在に気付き、炎のごとく燃えるまなざしで彼らを見  
<sup>1140</sup>るや、彼らのためにあらゆる拷問の用意をしたくて矢も槍も堪らなくなる。のどから火を  
<sup>1144</sup>吐き出しながら、全速力で炉まで走り、炎のように真赤な金属板を持ってあっという間に  
 戻ってくる。それをはさんでいる鉄は優に牛10頭分の目方がある。彼はそれを雲に向って  
<sup>1148</sup>かかげ、彼ら目がけて投げつける。風によって上空に引き上げられるときの竜巻でさえ、  
<sup>1152</sup>大弓の矢でさえ、さらに投石器の石でさえ、その速さには及ばない。金属板は高く上れば  
 上るほど燃え上り、上昇しながら勢いを取り戻す。ばらばらになったと思えば、再び一体

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

1156  
 になった。それは彼らの上に落ちず、通り越した。落ちた海中では林間のヒースのように  
 1160  
 燃える。海の中で大きい炎を上げながら非常に長い間燃えている。

風が舟を導き、それゆえ彼らはそこを逃れた。順風に乗り彼らは立去った。1164  
 1168  
 は何度もふり返って見た。炎と煙に包まれている島を見た。数千人の悪魔が見えた。劫苦  
 を受ける者たちの叫びと嘆きが聞こえた。はるか空中に広がる煙から、強い悪臭が彼らの  
 1172  
 ところまでとどいた。彼らは必死に耐え、必死に逃げた。聖なる人は、飢えや渇き、寒さ  
 暑さ、心配や悲しみ、そして恐怖といった多くの苦しみを持つとき、1176  
 1180  
 の幸が増す。彼らの場合がそうであった。神に対する彼らの信仰は固まり、彼らが信仰を  
 失うことはもはやない。彼らは前進する。何も恐れない。そのことにより、彼らは自分た  
 ちが正しく行動していることを自覚している。

翌朝、夜明けと共に、1184  
 彼らのすぐ傍に或る場所が見えた。雲に包まれた山であった。風  
 1188  
 が彼らをその方にどんどん押しやる。彼らはまたたく間に岸に着く。しかしその台地は非  
 1192  
 常に高く、彼らの中の誰ひとりとしてその山の高さを識別することはできなかった。それ  
 は頂辺から岸まで一定の角度で下っている。地面は真黒である。旅の間中、このような所  
 には出会ったことがなかった。なぜなのか彼らには分らないが、1196  
 （仲間の）ひとりが舟の  
 外にとび出し、姿を消した。全員その男が話すのを耳にした。大修道院長にのみその姿が  
 1200  
 見えた。「皆さん、今私は、私の罪ゆえに、あなた方のところからさらわれたのです。そ  
 のことをよく承知して下さい。」そして大修道院長は彼が100人の悪魔に引かれて行くの  
 を見る。悪魔たちは彼に悲痛な声を上げさせる。修道士たちはそこを去り、他の場所に向  
 1204  
 う。彼らは恐しかったので、互いに眺め合う。山の煙が晴れ、地獄が口を大きく開いてい  
 1208  
 るのが見えた。地獄は、火炎、燃える枝や金属板、そして松脂や硫黄を雲にとどくまで投  
 げ上げ、再びそれを受け取る。それらは地獄のものであるからである。

それからブランダンと修道士たちと共に海を走る。1212  
 十字の印で彼らを武装させる。海に  
 1216  
 岩のような隆起が見えた。それは実際岩であった。しかし彼らは信じることができない。  
 そこで大修道院長が言った。「さあ急ごう。それが何か確かめよう。走って行こう。」彼ら  
 1220  
 はそこに到着し、近づいた岩の上に、全く予期せぬものを見出した。裸の男が坐っている  
 のを見た。彼は非業の死をとげ、あらゆる方向に引っぱられ、1224  
 ずたずたに引き裂かれてい  
 1228  
 た。顔を布で結び、柱にくくりつけられていた。波にさらわれないように、自分を岩にし  
 っかり縛りつけていた。海の波が彼を強く打つので彼の死には終りが無い。波が彼を打つ。  
 1232  
 彼は落ちそうになる。別の波が後から押し上げる。前に危険。上に危険。後に危険。下に  
 1236  
 危険。右に嵐があれば、左にもそれに劣らない嵐がある。波が爪跡を残すとき、彼は非常  
 にあわれなうめき声をあげる。

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

「ああ、イエスよ、至高の王よ、私の死は冬にも夏にも（永久に）終ることがないのであろうか。全蒼穹を動かすイエスよ、すでにあなたの慈悲はこのように立派である。イエスよ、あなたは<sup>1244</sup>大そう慈悲深い。私が（苦悩の）外に出る時はないのでしょうか。イエスよ、マリアの息子よ、私は慈悲を乞うべきか否かわからない。私にはできないし、あえてやる<sup>1248</sup>勇気もない。というのは、私はあれほど大きな罪を犯したので、私に対する判決はすでに下されたからである。」

ブランダンが彼がこのように嘆くのを聞くと、今までにない大きな心の痛みを覚えた。彼は手をあげ、全員を祝福する。<sup>1252</sup>彼はそこに近付こうと必死になる。彼が近付いたとき、海は静まる。風も、そよ風も海をかき立てない。ブランダンが彼に言った。「言っておくれ、哀れなる者よ。<sup>1256</sup>あなたはなぜこの責苦を受けているのか。あなたが叫び求めているイエスに代り、私はあなたに命じる。今の間に答えよ。そしてあなたが誰で、<sup>1260</sup>どんな罪でここにいるのか言いたまえ。」ブランダンが彼のために泣き、それ以上話すことができず、それゆえ黙った。

その男は低い声でブランダンに話す。彼の声は非常に固く、非常に疲れていた。「私はイエスに仕えていて、彼を裏切ったユダである。私は私の主を売った者である。<sup>1268</sup>そして悲しみのため首を吊った。私は愛しているふりをして接吻し、和解させなければならない時に仲違いさせた。私は彼の財産を預かっていた。<sup>1272</sup>私はそれを秘かに盗んだ。イエスは、人が彼のために持ってきた捧げ物を全て貧しい人々に与えよと勧めていたのに、私はそれを私の財布の中に隠した。<sup>1276</sup>以上が私の刑罰の源である。私は星空を作った人に対し、それを隠しおおせると思っていた。私は神の貧しい人々に富を妨げたが、<sup>1280</sup>今彼らは豊かで、私は乞うている。私は神を憎んだ裏切者である。私は哀れな小羊を狼たちに売った。私は彼がピラトの手中にあるのを見た時、<sup>1284</sup>大そう打ちのめされた顔をした。私はこの敬虔なる人がユダヤ人の手に、この残酷な人々に委ねられたのを見た時、そして彼らがふざけて彼を崇め、<sup>1288</sup>いばらの冠を被せるのを見た時、さらに彼が卑しめを受けるのを見た時、私が非常に不幸であったことを知って下さい。それから私は、彼が殺されるために連れて行かれるのを見た。<sup>1292</sup>柔らかい脇から血が滲み出るのを見た。彼が十字架にかけられるのを、私に売られて死ぬのを見たとき、私はすぐに30ドニエを返した。<sup>1296</sup>彼らはすでに支払ったものを受け取ろうとはしなかった。私は分別をもって悔俊する代りに、怒りにまかせて自殺した。そして私は告白をしなかった<sup>1300</sup>ので、永久に劫苦を受けている。あなたは私が地獄でどのような刑罰を受けるのか知らない。今は私の刑罰の合間の休息である。<sup>1304</sup>土曜日は夜に、日曜日は1日中、日暮れまでこのような休息が与えられる。さらに、クリスマスから2週間、<sup>1308</sup>私は大きな刑罰を免除されここにやって来る。そしてマリアの祭日にも大きな刑罰を全く受けない。復活祭と聖霊降臨祭にも、<sup>1312</sup>あなたが今見ている以外には私は刑罰を受けない。



## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

1 年の他の祭日には、私は刑罰からの休息を持たない。日曜の夜、私は<sup>1316</sup>ここを去り責め苦を受けに行く。」

そのときブランダンが言った。「さあ教えておくれ。これが休息であるなら、<sup>1320</sup>責め苦と刑罰のためには、あなたはどのような場所に住むのか。そして償いのためにはどのような場所を与えられているのか。あなたはここを出てどこへ行くのか。」ユダが答える。<sup>1324</sup>「悪魔たちの領地であるその場所は近い。余り遠くないが、彼らの声が聞こえないほどには離れている。そこには隣り合う二つの地獄<sup>1328</sup>がある。それらを耐えることは大きな責苦である。その二つの地獄はこのすぐ近くにあり、夏も冬も（永久に）止むことがない。二つのうち軽い方でさえ恐ろしく、<sup>1332</sup>そこにいる者たちにとってはとても耐え難い。それを耐える者たちはこう考える。自分たちに比べれば、他の者たちは責め苦を受けているとは言えないと。私以外には我々の中で誰ひとり、<sup>1336</sup>二つの地獄のうちどちらでより多く罰せられるかを知る者はいない。どちらかひとつ以上与えられる者は誰もいないが、この哀れな私は両方を与えられている。ひとつは山に、もうひとつは谷にあり、<sup>1340</sup>それらを塩の海が隔てている。しかし驚いたことに、二つの地獄を隔てるその海は少しも燃え立たない。山の地獄の方が苦しく、<sup>1344</sup>谷の地獄の方が恐ろしい。空の近くの地獄は熱く汗が出る。海の近くの地獄は冷く臭い。夜も含めて1日、私は上にいる。<sup>1348</sup>それから下に移り住む。次の日には上り、その次の日には下りる。私の責め苦は果てしない。地獄を変えるのは、責め苦を軽減するためではなく、<sup>1352</sup>重くするためである。

月曜日は夜も昼も、私は車輪で回転している。哀れな私はその中に吊され、<sup>1356</sup>風のように速く回る。風がそれを空中の至る所に運ぶので、私は常に行ったり来たりする。

翌日私はそこから放り出され、<sup>1360</sup>啞然としているうちに、海の上を飛んで谷へ行く。多くの責め苦のあるもうひとつの地獄へ。そこではすぐにつながれ、<sup>1364</sup>悪魔たちにひどく責め立てられる。彼らは、私を串の寝台に横たえ、私の上にくいつかの鉛と岩を置く。そこで余りにも多く突き刺されるので、<sup>1368</sup>ごらんの通り私の身体はこんなに穴があいているのである。

水曜日には上に追いやられる。そこでは私に対する刑罰が変えられる。ほとんど1日中私はタールピッチの中で煮られる。<sup>1372</sup>それゆえごらんの通り私は真黒である。次に、そこから取り出され、柱に結えられ、2つの火の間で火炙りにされる。鉄の柱がそこに据え付けられている。<sup>1376</sup>それは私のためであって、他の者のためではない。それは、まるでふいごであおられた火の中に10年間置かれていたかのように真赤である。タールピッチにより身体中に火がつき、<sup>1380</sup>私の責め苦が増大する。それからタールピッチの中に投げ戻され、もっとよく燃えるように油を注がれる。<sup>1384</sup>その火の上に置かれても溶けてしまわないほど固い大理石はない。しかし私の身体はこの責め苦用に作られているので、消滅することができない。

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

このような刑罰を、それがどれだけ私を苦しめようが、<sup>1388</sup>1日中、一晩中、私は受けるのである。

次いで木曜日に、私は谷に置かれる。そこでは反対の責め苦を受けるため、寒い場所に入れられる。<sup>1392</sup>そこは真暗かつ真黒である。そして余りにも寒いので、あれほど強く私を焼く火の中に入るのが待ち遠しくなる。それゆえ寒さほど私にとって辛い責め苦はないと思われる。<sup>1396</sup>どの責め苦に関しても、そのとき私が受けているものほど強いものはないと思われる。

金曜日には上に戻る。<sup>1400</sup>そこには多くの死が私のために用意されている。私は身体中の皮を剥がれるので、外側には皮は全くない。次に塩の入った煤の中に入れられ、焼けた杭で押しつぶされる。<sup>1404</sup>それから新しい皮膚が急速に生える。この責め苦をくり返すためである。日に10回、私は皮をむかれ、<sup>1408</sup>塩の中に押し込まれ、銅と共に溶かした鉛を熱いまま飲ませられる。

土曜日には下に投げ落される。<sup>1412</sup>他の悪魔たちが違った責め苦を用意する。私は牢獄に入れられる。地獄中でそこほど恐ろしい所はない。地獄中でそこほど汚い所はない。<sup>1416</sup>私はそこに綱なしで降りる。そこに明かりはなく、私は暗闇と悪臭の中に横たわる。余りにもひどい悪臭が来るので、<sup>1420</sup>私は心臓が破裂するのではないかといつも思う。彼らが私に飲ませた銅のため私は吐くことができず、身体が腫れ、皮が張る。<sup>1424</sup>私は苦悩する。もう少しで破裂しそうである。ユダはこのような熱さ、寒さ、悪臭、苦悩を受けている。

昨日は土曜日であったので、<sup>1428</sup>私は正午と3時の間にここに来た。今日私はこの場所で休息する。間もなく嫌な夜が来る。すぐに千人の悪魔がやって来る。<sup>1432</sup>彼らが私を手に行っているときは、私は休息できない。しかし、もしあなたにその力があるなら、今晚私に休息を与えて下さい。もしあなたがそれに値するなら、<sup>1436</sup>今晚私を自由にして下さい。私にはあなたが聖人で敬虔であることがわかる。あなたは恐れることなく、このような場所に来るのですから。」

ブランダン<sup>1440</sup>はさめざめと泣いた。この者がこれほど多くの苦悩を耐えているからである。彼が自分を縛りつけているその布は何に関係するのか教えてくれとブランダン<sup>1444</sup>は命じた。そして彼がのっているその岩はどこから、そして誰に由来するのか、と聞いた。ユダ<sup>1448</sup>が彼に答える。「生前、私はほんの少しの善行と多くの悪行を行った。善行と悪行は、どちらの方が私の心にとって大切であったか、今になってははっきりわかる。私が預かっていた布施<sup>1452</sup>の中から、私は貧しい裸の男に服を買ってやった。それゆえ、溺れないように私の口のまわりで私を縛っているこの布が与えられた。波が前から顔に打ち寄せるとき、これが少しは守ってくれるが、地獄では何の役にも立たない。<sup>1456</sup>私の財産は私自身のものではなかつ

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

たからである。ある川の中に、私は小さな丘と、その上に小さな橋を作った。それまでそこで多くの人が死んでいたが、<sup>1460</sup>それ以後は救われた。それゆえ、私のかくも大きい不幸が軽減された。」

夕暮れが近付いた時、<sup>1464</sup>ブランダン<sup>1468</sup>は彼のことが真実であることを知った。彼は、千人の悪魔が責め苦と刑罰をたずさえて現われるのを見た。彼らはこの哀れな者の方にまっすぐやって来る。ひとりが前にとび出し、鉤で彼をとらえる。ブランダンが彼らに言う。「月曜日の朝まで彼をここに残せ。」<sup>1472</sup>彼らは彼にさからって、彼を連れず置いて行くことなどできないと言う。そこでブランダン<sup>1476</sup>は言った。「私はお前たちにそれを命ずる。イエスは私の守護者である。」<sup>1480</sup>彼らは意に反しユダを残す。彼らには反撃の余地はなかった。ブランダンはその夜そこにとどまった。悪魔たちは邪魔することなく、向う側にとどまる。<sup>1484</sup>彼らは朝を待ち望む。彼らは怒り狂い、どなって言う。彼の刑罰を2倍にしてやる！と。大修道院長が答える。「彼は、<sup>1484</sup>審判で定められた以上に責め苦を受けることはない。」夜が明けると、彼らはユダと共に戻って行った。

ブランダン<sup>1488</sup>は前進する。神の加護を受けていることを確信する。そして修道士たちは全員、神に導かれているので安全であることをよく知っている。彼らは神に、それまでの旅と、<sup>1492</sup>必要なものを全て整えてくれたことを感謝する。彼らが仲間の数を数えると、1人欠けている。彼らには、<sup>1496</sup>彼がどうなったのか、どこで勾留されたのかわからない。はじめの2人に関しては、どのようにして彼らが去ったか知っている。ところがこの第三の者に関しては戸惑った。<sup>1500</sup>大修道院長が彼らに言った。彼は全てを知っているのである。「神は彼をみこころのままになされた。あなた方はこのことで恐れてはいけない。むしろあなた方の道をしっかり歩みなさい。<sup>1504</sup>彼が、休息にしろ責め苦にしろ、自分の裁きを受けることを知りなさい。」

彼らが進んで行くと、非常に高い山が海の中にぽつんと浮んでいるのが見えた。彼らはすぐにそこに到着する。しかし岸は<sup>1508</sup>陰しく、人を寄せつけない。大修道院長が彼らに言った。「私は舟の外に出る。私以外は誰も動かないように！」<sup>1512</sup>彼は山を登り、何かを見つけるまでどんどん進む。岩の間の道をたどった。するとひとつの岩が突然彼の前に現われ、そこから1人の男がとび出した。<sup>1516</sup>敬虔な修道士であるらしい。その男はブランダンの名を呼んだ。彼は神によりその名を知っていたからである。それから彼に接吻し、<sup>1520</sup>仲間たちを1人残さず連れて来るように言った。ブランダン<sup>1524</sup>はそこに行き、彼らと呼ぶ。彼らは舟を岩につなぐ。その男は全員を名前<sup>1524</sup>で呼んだ。「こちらに来て、私に接吻せよ。」彼らはそうした。それから彼は修道士たちを彼の住居に連れて行き、見せた。勧められたように、

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

<sup>1528</sup> 彼らは休息する。彼らは、彼とその衣服に驚嘆する。体毛以外には衣服はなく、それによ  
 って彼は薄布によるごとく被われているのである。彼は天使のようなまなざしと、<sup>1532</sup> この世  
 のものならぬ身体を持っていた。この修道士の体毛より白く輝く雪はない。ブランダンが  
 彼に言った。「親愛なる教父殿、<sup>1536</sup> あなたが誰であるのか私に教えて下さい。」彼が「喜こん  
 で。私は陰者ポールという者である。私はここであらゆる苦痛から解放されている。ずっ  
 と昔からここにいる。<sup>1540</sup> そしてこのことは神の指示により私に起った。娑婆世界では私は森  
 の隠者であった。私は私の意志でその生活を選び、わずかしかな私力を全て注いで、  
<sup>1544</sup> 可能な限り神に仕えた。神は善意によりそれを受け取り、私の行為を必要以上に評価され  
 た。神は私に、<sup>1548</sup> ここに来て、栄光を待つよう命じ給うた。私がどのようにしてここに来た  
 か？ 私は舟に乗り込んだ。私がその舟を見つけたとき、それは完全に用意が整っていた。  
<sup>1552</sup> 神が私を速かに、静かに導いてくれた。私が到着すると舟は立ち去った。

私がここに来てから90年になる。ここは気候が良く、永久に夏である。私はここで審判  
 を待っている。<sup>1556</sup> それが神の命令である。私はここで完全に肉体と骨に包まれているが、苦  
 悩はなく、休息の状態にある。そこで審判のときはじめて魂が肉体から離れ、私は、私の  
<sup>1560</sup> 送った生活ゆえに、正義の人々と共に蘇るであろう。丸30年の間忘れず世話をしてくれた  
 従僕がいる。それはかわうそであった。彼は度々、つまり必ず週に3回、私に食べさせる  
 魚を持ってきた。彼が3匹の魚を持って来ないまま、<sup>1564</sup> 週が空しく過ぎたことはなかった。  
 私の食事はそれで十分であった。私が魚を焼くことができるように彼は、<sup>1572</sup> 完全に乾燥した  
 漂流物のつまった小さい袋を首にかけて持って来た。それが誰によるものか。主以外には  
 ない。私がここに来た最初の30年間ずっと、私はこのようにして食物を与えられた。魚は  
<sup>1576</sup> 大変滋養があったので何も飲む必要がなかった。我々の主は、<sup>1580</sup> このような食事にも、もっ  
 と大そうなものにも心を煩わせなくなった。すなわち、30年後にはかわうそが戻って来な  
 くなった。それはかわうその悪意によるものでも、私を軽蔑したからでもなく、神がもは  
<sup>1584</sup> や、私1人だけのために外から食事が運ばれるのを望まなかったからである。神は私のた  
 めにここに、あらゆる滋養分に満ちた泉を作られた。そこからわずかでも飲む者には、<sup>1588</sup> 完  
 全な食事で満腹したかのように思われる。私はこの水によって60年生きてきた。魚で30年  
 であるから、合計90年。娑婆世界では私は50才であった。<sup>1592</sup> 私の年は140才である。ブラン  
 ダン修道士よ、私はあなたに、ここで私がどのように無上の喜びを与えられているかを  
 話した。しかしあなたは天国に行くのです。<sup>1596</sup> あなたがそれを求めてほぼ7年になる。今日  
 あなたは後に戻るのです。かつて滞在したあの善良なホストの所に。彼があなたを案内す  
 る。そしてあなたは彼の後に従い、<sup>1602</sup> 敬虔な人々のいる天国に行くのです。飢えと渴きをい  
 やすためにこの水を持って行きなさい。さあ舟に入って。<sup>1604</sup> ぐずぐずしないで。風を無駄に  
 すべきではない。」彼はブランダンを送り出し、ブランダンは彼の厚意に感謝し、別れを  
 告げる。

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

今彼らはあのホストの所に向う。<sup>1608</sup>暗雲が空を覆っている。彼らは直行するにもかかわらず、到着するまで長い間航海する。そして最後の晚餐の聖木曜日<sup>1612</sup>にようやくそこに到着する。いつも同様、出発しなければならない時までそこに滞在する。土曜日には魚のところに<sup>1616</sup>行き、他の年と同様そこで（復活祭を）祝う。彼らは、今や7年来この魚が彼らの従僕であることを認識した。彼らは神を称える。<sup>1620</sup>誠実な神の徳のおかげで、彼らはそこで無事であったからである。その翌日、彼らは折りしも吹いてきた風に乗って出発し、<sup>1624</sup>彼らが2ヵ月滞在することになるあの小鳥たちの島に直行する。彼らは喜こんでそこに滞在し、あのすばらしいホストの案内を待つ。彼は修道士たちと共にすばらしい旅をするであろう。<sup>1628</sup>ホストはその旅が長いことを知っているの、彼らに必要なものを全て用意する。何が彼らに必要であるかを知っているの、<sup>1632</sup>できる限りのものを積み込んだ。修道士たちはそのホストと共に海に出る。彼らは2度とそこには戻らない。彼らは東に向って走る。中に案内してくれる者がいるので、<sup>1636</sup>少しも道に迷わず、彼らは楽しく、喜び勇んで旅をする。<sup>1640</sup>40日間ぶっ通しで外海を航海する。海と水の上の空しか彼らの前に現われない。そして王なる神の同意により、<sup>1644</sup>今彼らは、アダムが君臨していた天国を取り巻く霧に近づく。<sup>1648</sup>彼の子孫がそこに戻れないように、大きな雲が暗闇を作っている。神によりこの雲を通過するための視力を与えられた者以外は、この深い霧がそこに入る者を盲にし、視力を奪う。そのときホストが言った。「急いで帆に風を張りなさい。」<sup>1652</sup>彼らが近付くと、通路の広さに雲が分かれる。中に入ると、霧が彼らに大きく道を開ける。左右の雲の壁に関しては、<sup>1656</sup>彼らはホストを大いに信用する。大きく濃密なその雲は両側に高くそびえている。彼らの前に<sup>1660</sup>現われる道を通して、3日間真っすぐに走る。4日目にこの霧の中から出た。巡礼たちは大いに喜ぶ。<sup>1664</sup>彼らは雲から出て、天国を目にした。<sup>1668</sup>

最初に壁が彼らの前に現われる。それは空の雲までとどくほど高く、のぞき窓も通路も<sup>1672</sup>櫓も、いかなる塔もない。彼らの中には誰1人として、それがどんな素材でできているのかを知っている者はいないが、それはどんな雪にも増して白かった。<sup>1676</sup>それを作ったのは至高の王である。継ぎ目がなく完璧である。神は造作なくそれを作られた。壁に嵌め込まれた宝石が大きな輝きを放っている。選び抜かれた、金の斑入りの橄欖石がたくさんある。<sup>1684</sup>トパーズ クリソプレーズ ヒヤシンス カルセドワヌ エメラルド サルドワヌ  
壁は黄玉、緑玉髓、風信子石、玉髓、緑玉石、紅玉髓で炎え上り、火がついたようである。<sup>1688</sup>アモシスト ジャスプ ヒアシンス ベリル  
壁の縁では、紫水晶と並んで碧玉が強く輝いている。明るい風信子石が水晶や緑柱石と共にきらめき合っている。<sup>1692</sup>この配置は大変巧妙で、お互いに強い光を当て合って様々の色を浮き出させるようになっている。その壁のはるか先の山々は高く、堅い大理石でできおり、<sup>1696</sup>波が打ちつけている。その大理石の山の上に純金の山がある。さらにその上に、<sup>1700</sup>天国の花々をとり囲む壁がある。我々が中に住むはずであったその壁はそのように高い所にあった。修道士たちは真っ直ぐ門に向って進む。<sup>1704</sup>しかしその入口は非常に堅固である。それ

## アングロ・ノルマン版「ブランダン航海」試訳

を守る竜たちがいる。彼らはまるで火のごとく焼き尽す。入口には1本の剣が吊るされている。<sup>1708</sup>それを恐れない者は賢明でない。剣先は下、柄は上を向いているからである。修道士たちが恐れても私は驚かない。その剣は左右に揺れ、くるくる回っているからである。<sup>1712</sup>それを見るだけで目まいがする。鉄も岩も、ダイヤモンドでさえ、その鋭い刃から身を守ることはできない。

そのとき彼らは、1人の若者が彼らの方に来るのを見た。その若者は非常に美しかった。<sup>1716</sup>彼は神の使いである。上陸せよと彼らに命じた。彼らが着くと迎え入れ、全員を正しい名<sup>1720</sup>で呼びながら静かに彼らに接吻した。それから竜どもを静め、<sup>1724</sup>それらを従順に、おとなしく伏せさせる。そして天使を呼んで剣を止めさせる。入口が開けられた。彼らは全員、<sup>1728</sup>確かな栄光の中に入る。

若者が先に立ち、彼らに天国を案内する。<sup>1732</sup>彼らは美しい森や川に覆われた土地を見た。<sup>1736</sup>美しい花の絶えない草原が庭となっている。敬虔な人が住む場所にふさわしく、花々が甘い香を放つ。木や優雅な花、果実が世にも稀な香を放つ。<sup>1740</sup>いばらもアザミもいら草ものさばってはいない。芳香を放たない木も草もない。いつでも花が咲き、木は実をつけている。<sup>1744</sup>季節によって遅れることはない。そこは永久に快い夏であるから。木や花の実<sup>1748</sup>は熟し、森は獲物で、川という川はおいしい魚で満ちている。そこには乳の流れる川がある。この豊饒が隅々まで行きわたる。<sup>1752</sup>空から降る露のおかげで、川床は蜜を出す。金でできていない山はなく、<sup>1756</sup>宝石に相当しない石はない。明るい太陽が果てしなく輝き、風は、微風でさえ髪の毛ひとつ動かさない。空の雲が現われて、太陽の明るさを奪うことは永久にない。<sup>1760</sup>ここに滞在する者はいかなる苦悩も持たない。嵐を知らず、暑さ寒さ<sup>1764</sup>も不幸も飢えも苦しむことはない。あらゆる善で満たされる。彼は最も欲するものが失われないことを確信し、それが手の届くところにあるのを見出す。ブランダンはその喜びをとくと見る。そこにとどまってこれを見る時間<sup>1768</sup>が少なすぎると思われる。長い間そこにいたいと彼は思う。若者は彼を先に案内し、<sup>1772</sup>多くの物を彼に示した。彼は、修道士たちがそれぞれどのような喜びを持つことになるかを詳細に描写し、語った。<sup>1776</sup>若者は杉の木のように高い山に登り、彼らは彼に従った。そこから彼らは、説明できないような光景<sup>ヴィジョン</sup>を見る。彼らは天使たちを見、<sup>1780</sup>声を聞く。天使たちは何と彼らの訪問を喜こんでいることか。彼らは天使たちの崇高な歌を聞く。しかし彼らはそれを耐えることができない。彼らの人性はこのように大きな栄光<sup>1784</sup>を受けたり、聞いたりすることができないのである。若者が彼らに言った。「戻りましょう。これより先にあなた方を連れて行くことはできない。あなた方をここから先に行かせることはできない。<sup>1788</sup>あなた方はそれを知るには小さすぎるからである。ブランダンよ、あなたは、あなたがあれほど神に求めた天国を見ている。あなたが見たものの10万倍の栄光<sup>1792</sup>がこの先にある。今あなたはこれ以上知ることはできない。あなたが再び戻ってくるまで

## 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

は。今あなたは肉体と共にここに来ているが、<sup>1796</sup>間もなく霊として戻るであろう。あなたはここで審判を待つであろう。私はあなたに、<sup>1800</sup>慰めの印にこの石をいくつか持たせてあげよう。」彼がそう言い終ると、ブランダン<sup>1804</sup>は天国の証を持って去る。彼は神と天国の最愛の聖人たちに別れを告げた。若者が彼らを連れて戻る。彼らが全員舟に入ると、若者は彼らを祝福した。<sup>1808</sup>彼らは速かに帆を引き上げる。彼らの敬虔なホストはそこに残る。天国が彼の正当な住居であるからである。

修道士たちは嬉々として出発する。<sup>1812</sup>風による遅れはなく、神の偉大な徳により、3カ月にアイルランドに着いた。<sup>1816</sup>ブランダンが天国から帰ったという知らせが国中に走る。喜こんだのは家族だけではない。全ての人々が共に喜こんだ。修道士たちは、<sup>1820</sup>彼らのやさしい教父が戻ってきたことを、誰にも増して喜こんだ。ブランダンは、どのように航海したかを彼らに何度も話した。順調な時のこと、困難に陥った時のこと、<sup>1824</sup>そして彼が神に必要なものを求めると、いつでもそれがかなえられたことを彼らに語った。彼が求めたものをどのように見出したか、彼は次々と話した。彼らの中の多くは、<sup>1828</sup>彼らがブランダンの中に見た徳ゆえに、聖なる生活を送った。ブランダンは娑婆にいる間、神の徳により多くの人々のために尽くした。彼が現世を去る時が来ると、<sup>1832</sup>彼は神によって定められた所に再び行った。彼が入った神の王国に、彼のおかげで千人以上の人々が入る。

「聖ブランダンの生涯」ここに終る。

以上はアングロ・ノルマン語による「聖ブランダンの航海」の翻訳である。テキストには、写本 London, British Library, Cotton Vespasian B. X(I), ff. 1-11 と、同写本に基きイアン・ショート、ブライアン・メリリー両氏が編集、出版した The Anglo-Norman Voyage of St. Brendan, 1979, Manchester University Press を使用した。